

2023年9月24日 礼拝説教要旨

ハイデルベルク信仰問答講解説教Ⅱ「死に赴く神」

イザヤ53：8～10、マタイ27：45～50

問40なぜキリストは「死」を苦しまなければならなかったのですか。

答 なぜなら、神の義と真実のゆえに、神の御子の死による以外には、わたしたちの罪を償うことができなかったからです。

問41なぜこの方は「葬られ」たのですか。

答 それによってこの方が本当に死なれたということを証するためです。

聖書は、人間の死を罪の結果として捉えています。神さまはアダムと約束をしました。「善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」（2：17）アダムとエバはこの神さまとの約束を破ってしまいます。それゆえ人間は死を定めとして負いました。パウロも「罪によって死が入り込んだ」（ローマ5：12）と言います。この罪が解決しないまま、神さまに背いたまま死ななければならぬことが死の本当の怖さです。それは罪に対する神さまの裁きとしての死だからです。

イエスさまはそのわたしたちの死を死なれました。神さまに背いた結果負わなければならなくなった死をイエスさまが代わって死んでくださったのです。信仰問答では「神の義と真実のゆえに、神の御子の死による以外には、わたしたちの罪を償うことができなかった」と言います。言い換えれば、神の御子であるイエスさまが死んでくださったことによって、そこで完全な償いがなされ、もはやわたしたちが罪の責任を負うことはなくなったということです。それでわたしたちは良かったと胸をなでおろすかもしれませんが、しかしイエスさまはその死において、苦しみの極みを経験されました。わたしたちに向けられていた神さまの怒り、呪い、裁きをすべてその身にお受けになられたのです。信仰問答の間44は次のように言います。

問44なぜ「陰府にくだり」と続くのですか。

答 それは、わたしが最も激しい試みの時にも次のように確信するためです。すなわち、わたしの主キリストは、十字架とそこに至るまで、御自身もまたその魂において忍ばれてきた言い難い不安と苦痛と恐れとによって、地獄のような不安と痛みからわたしを解放してくださったのだ、と。

使徒信条の「陰府にくだり」について、信仰問答はイエスさまがああ十字架において、言い難い不安と苦痛と恐れを担われていたと言います。宗教改革以降、プロテスタント教会では、イエスさまの十字架の死こそ陰府であると解釈します。それは神さまとの関係が完全に断たれている状態です。イエスさまは十字架で「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」（27：46）と叫ばれました。罪ゆえに神さまに見捨てられる。その地獄のような死の苦しみをイエスさまがすべて引き受けてくださいました。それゆえに信仰問答は「地獄のような不安と痛みからわたしを解放してくださった」と言います。イエスさまがわたしたちに代わって死んでくださったことで、わたしたちはそういう罪の償いの死を死ななくてよくなった。もはやわたしたちは罪の責任を考えて悩んだり、心配する必要はないのです。問42はその救いを言い表します。

問42キリストがわたしたちのために死んでくださったのなら、どうしてわたしたちも死ななければならぬのですか。

**答** わたしたちの死は、自分の罪に対する償いなのではなく、むしろ罪との死別であり、永遠の命への入口なのです。

確かにわたしたちは死にます。アダム以来、罪ゆえに人間は死すべき存在になりました。けれどもその死の意味が変わりました。もはや罪ゆえに神さまの裁きを恐れながら死を迎えるのではなく、「永遠の命」つまり神さまと共にある天の御国を望み見ることができる。十字架の上でイエスさまは強盗の一人に「あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる」(ルカ 23:43)と約束されました。そのようにわたしたちはイエスさまと一緒に樂園に入るのです。わたしたちはそういう死を死ぬことができる。罪の償いとして死を迎えるのではなく、むしろ永遠の命、神さまの御国に入る入口となった。神さまの救いは死の意味を完全に変えてしまわれました。

キェルケゴールは、死に至る病は絶望であると言いました。そして絶望は罪であると。イエスさまの救いを知らなければ、死は絶望でしかありません。しかしわたしたちはイエスさまによって罪を贖われ、永遠の命を約束されました。死の先に永遠の命を見るのです。絶望ではなく希望をもって死を迎えることができる。だからこそ教会は死者を葬ることができます。希望ある葬りが可能になります。

そしてこの救いは今を生きるわたしたちの生き方を大きく変えることになります。

**問43** 十字架でのキリストの犠牲と死から、わたしたちはさらにどのような益を受けますか。

**答** この方の御力によって、わたしたちの古い自分がこの方と共に十字架につけられ、死んで、葬られる、ということです。それによって、肉の邪悪な欲望がもはやわたしたちを支配することなく、かえってわたしたちは自分自身を感謝のいけにえとして、この方へ献げるようになるのです。

「肉の邪悪な欲望がもはやわたしたちを支配することなく」とあります。それまでわたしたちは罪に支配された存在でした。罪に支配されているということは死に支配されていることです。その中ががんじがらめに捕らわれていました。戦争はまさにその象徴です。正義のための戦争などありません。どの時代も戦争に大義名分をつけては正当化しますが、それは肉の邪悪な欲望以外の何ものでもありません。その先には死があるのみです。しかしそのような罪と死の支配からわたしたちを奪い返すために、イエスさまは死なれました。わたしたちの恐れてやまない死の中に入られ、神さまの裁き、地獄のような死の苦しみを経験された。そしてそこに捕らわれているわたしたちを解き放ってくださいました。イエスさまがラザロを墓から呼び出されたのも、ナインのやもめの息子、ヤイロの娘を死から呼び覚まされたのも、それはすべてこの罪と死からの救いを示します。教会はこの死からの救いを福音として伝えています。

天の父よ。罪ゆえにわたしたちが恐れてやまない死を御子はその身に負ってくださいました。それによって死の意味を変えてしまわれます。イエスさまによって死は永遠の命の入り口になりました。そこにわたしたちの希望があります。どうぞこの死から救われた喜びをもって新しく生きるものとさせてください。主の御名によって祈ります。アーメン。